

2005年12月の寄贈品コーナー（12月1日～25日） 「平成16年度湘南新道関連遺跡群」の見どころ

湘南新道関連遺跡は都市計画道路3・3・6号湘南新道街路整備事業に伴う事前調査として、平成12年度から継続的に実施されており、四之宮廃寺跡・大会原遺跡・坪ノ内遺跡・六ノ域遺跡が対象となる複合遺跡群をさします。今までに、縄文時代・古墳時代・古代・中世・近世の遺構・遺物が発見されており、大変大きな成果を上げています。今回は平成16年度に実施された成果の一部を展示しました。その最大の見どころの古代の大型建物跡について紹介します。

発見された場所は大念寺の東、旧厚木道の東側付近です。建物は8世紀前半の南北棟で、梁行3間（11m）、桁行き9間以上（25m以上）、東西に庇がある非常に大きなものです。この発見により、平成16年12月3日に新聞等に発表され、4日に現場説明会が行われたことは、皆様の記憶に新しいことと思います。報道では、相模国府に関連した格式のある大型建物として紹介されました。

さて、発見された意義について考えてみたいと思います。先ず第1は、従来から「相模国府」は平塚に所在するとの見解が大勢を占めていましたが、ただ8世紀前半の大型建物が発見されていないので、確定するにはまだ問題があるとの指摘がありました。今回の県内最大級の建物跡の発見で、その点は解決されたと考えていいと思います。第2は、大型建物の性格が問題になるかと思っています。報道によると、「国政をつかさどる役所『国庁』に付随する『曹司』の中心的な施設」として紹介されました。この建物は全国で発見されている官衙建物の中でも非常に大きな建物であることは事実です。もし、国庁の脇殿としたならば、庇が付く建物は全国で初めての建物になります。それだけに格式をもった国庁の脇殿になると考えます。曹司の中心的建物としたならば、税務・財政などを行う部門の建物と想定されます。

今後、周辺地域のきめ細かい調査が必要ですが、相模国府所在地が確定し発見と言えます。（明石）

